The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	繰り返されざる旅 Sequel : 『キホーテ神父』における『ドン・キホーテ』の受容
Author(s)	鴨川, 啓信
Citation	Osaka Literary Review. 1997, 36, p. 64-77
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25391
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

繰り返されざる旅 Sequel
―『キホーテ神父』における『ドン・キホーテ』の受容―

鴨 川 啓 信

序

そのタイトルに示されているように、グレアム・グリーン（Graham Greene）の『キホーテ神父』（*Monsignor Quixote*, 1982）は、セルバンテスの『ドン・キホーテ』（前篇, 1605; 後篇, 1615）に似せて作られている。このような意図的な繰り返しによって、前者は後者の如何なる面を利用しようとしているのか。あるいは引き継いでいるのか。

OLR 前号にて、『キホーテ神父』と『ドン・キホーテ』との比較それ自体について考察した。そしてその２つの物語間には類似点と同時に（当然ながら）相違も存在し、その比較は一方の読み方で他方の提起する問題を解明すること（多くの場合『ドン・キホーテ』により『キホーテ神父』中の謎に答えを与えること）ではなく、似てはいるが異なる２つの物語の距離を探りながら、一方の読み方（この場合は『キホーテ神父』の読み）のため、その２つの物語の関係が暫定的な足場を築くことであるとの見解を示した。

本稿では、上述の考えに基づき、前回断片的にしか示せなかった両物語の比較を実践し、比較による『キホーテ神父』の読みを提示していく。その読みは以下に３つの話題に沿って展開することとする。すなわちキホーテ神父の出自の問題、その冒険の性質, そしてその死を巡る顛末である。その際この２つの物語の関係に、グリーンの小説での『ドン・キホーテ』の受容の形が表れていることにも注意を払っていく。

I

『キホーテ神父』というタイトルを見て、その紹介を読み、まず第一に多くの読者の頭に浮かぶだろう疑問が、その物語の終わり間際に登場人物の1人の言葉を借りて示される。“Don Quixote had no descendants. How could he? He's a fictional character” (*Monsignor Quixote* (以下 MQ) 208). この言葉を目にする頃には逆に多くの読者は、タイトルの人物であるこの神父がドン・キホーテの子孫であることを、物語内の事実として受け入れ始めているかもしれない。だが小説冒頭での別の人物による言葉 “How can he be descended from a fictional character?” (MQ 12) と呼応して、ドン・キホーテの子孫という関係が、決して物語内での疑いのない事実ではないことが強調される。グリーンがその小説で舞台としているのは、ドン・キホーテが実際に存在した世界というより、『ドン・キホーテ』が実際に書かれた世界である。では「キホーテ」神父とは何者なのか。これがこの小説中に解答の示されないまま突きつけられる謎の1つ、キホーテ神父の出自である。

“A fictional character” と言われる遍歴の騎士ドン・キホーテは、二重の意味で fictional である。セルバンテスのフィクションの登場人物というだけでなく、その物語の始めに “In a village of La Mancha ... there lived not long ago one of those gentlemen” (*Don Quixote* (以下 DQ) 25) と紹介される「キハーダ[1] (Quixada)」(もしくは「ケサーダ (Quesada)」、「ケハーナ (Quexana)」) なる郷士が, 騎士道物語の影響を受けて自らにその姿を与えるために作り出した架空の人物であるのだ。ドン・キホーテと、現実存在であるラ・マンチャの郷士とは、はっきりと区別されている。小説『キホーテ神父』の中で、“Cervantes himself says the surname was probably Quixada or Quesada or even Quexana, and on his deathbed Quixote calls himself Quixano” (MQ 13). と、やはりその区別が示され

ることで、「キホーテ」神父は（ラ・マンチャの郷士ではなく）この架空の騎士ドン・キホーテの子孫であると位置付けられる。ドン・キホーテを架空の存在と考える人々にとって、「キホーテ」の姓自体、“Quixote is not even a Spanish patronymic”（MQ 13）や“Quixote! Impossible”（MQ 208）との反応を引き起こすように、現実に属するものではなく、郷士によるフィクションなのだ。従ってその立場では、「キホーテ」の血族である神父もまたフィクションということになる。しかしながら「キホーテ」神父誕生のいきさつは謎のままであり、彼には「キハーダ」や「ケサーダ」のような、フィクションを現実から切り離すための別の名前は用意されていない。

「キホーテ」神父が物語内に存在するということは、ドン・キホーテを全くのフィクションとする前述の見方も、また疑われるべきものであることを示している。現実存在の郷士とフィクションのドン・キホーテとの区別を含む、『ドン・キホーテ』で示される「事実」が、そもそも問題を孕んでいると考えると、「キホーテ」神父という人物設定が表しているのは、“the tension between fact and fiction in *Monsignor Quixote* find[s] an explicit intertext in Cervantes's *Don Quixote*”（Pendleton 153）ということ。両物語の類似性として、事実／現実とフィクションとの問題を含んだ関係にどちらも焦点を当てているということ。すなわち『キホーテ神父』は、そういう物語として『ドン・キホーテ』を受容しているということである。

遍歴の騎士ドン・キホーテの誕生について、前述のラ・マンチャの郷士を片方の親とすると、もう片方の親は騎士道物語であると言えよう。郷士の属する現実には遍歴の騎士など存在しないため、騎士道物語の示す手本に従わなければ、遍歴の騎士ドン・キホーテの存在はありえない。フィクションに従って成り立っているフィクションというこの存在形態は、『ドン・キホーテ』という書についてもあてはまる。度々言及されるように、その中には騎士道物語を始めとして古いバラッドや牧歌等の表現や形式、モチーフが数多く盛り込まれている。その中の１つが、ナボコフが『ドン・キホーテ』の構

造上の10の工夫の1つとして挙げている、架空の物語作家の仕掛けである。この物語の中で語り手セルバンテスは、アラビア人の歴史家「シーデ・ハメーテ・ベネンヘーリ（Cide Hamete Benengeli)」の記した（厳密には前篇の第9章以降であり、それ以前は別の人物による）ドン・キホーテの「歴史」を語り直す "the second author of this work"（DQ 64）と自らを呼んでいる。加えてその「歴史」は、語り手とは別の手によって、アラビア語からカスティーリャ語に訳されたものである。こういった手法が騎士道物語の伝統的形式のパロディとなっている点は別にしても、この架空の歴史家を導入することで、「語り直し」の過程に疑いを差し挟む余地ができている。

語られる対象の「歴史」や「事実」と語り手による物語との間に多くの手が入ることで、その間に明白な距離が作られている。そしてそこには、翻訳者の間違いや語り手の読み違いだけでなく、"he was uneasy at the thought that the author was a Moor, judging by the title of 'Cide,' and no truth was to be expected from Moors"（DQ 438）とドン・キホーテ自身が懸念するように、そもそも「事実」が語られていない可能性もあるのだ。当然、郷士が現実存在で遍歴の騎士がフィクションという位置付けにも疑いの余地があると言える。（我々読者の世界における、現実とフィクションの逆転についてはまた後に見ることとする。）グリーンの小説中、セルバンテスが "the great biographer Cervantes"（MQ 103）のように呼ばれることが数度あるが、これは架空の歴史家の仕掛けのパロディとなっている。確かに（特に我々読者にとっては）先祖の騎士の実在を、それ故に「キホーテ」神父の実在を保証するようなこの肩書きは、滑稽な作り話であるとも言える。しかし歴史家の存在が、語り手の示した「事実」に疑いの余地を与えているように、"biographer Cervantes" は、この疑いの余地に入り込み、「キホーテ」の名前がフィクションではない可能性も指し示している。この "biographer" の概念は、『ドン・キホーテ』での歴史家の仕掛けに対する『キホーテ神父』の応答である。ドン・キホーテの出自も、より正

確に言えばドン・キホーテの出自についての記述も，確かなものではないのだ。

『ドン・キホーテ』における「現実」について論じた John J. Allen は、フィクションの中にフィクションを内包していくその特徴を指摘している。特に後篇にその前篇が登場するに至り、一見現実を代表しているような、前篇を読んだ後篇の登場人物達も、前提として（彼らがその非現実性を笑いものにする）ドン・キホーテのフィクション内の掟（魔法使いの存在）に基づいており、やはり我々読者との間には距離があることが示される。ラ・マンチャの郷士、架空の歴史、フィクション（後篇）内フィクション（前篇）。遍歴の騎士ドン・キホーテと読者の現実との間には、数々のフィクションが入り込み、距離が作られている。現実がドン・キホーテからどんどん離れていっているよう思われる一方で、“The primary effect of these devices is the enhancement of the illusion of reality”（Allen 921）と、「現実の幻影」がその距離を作るフィクション上に映し出される。物語内現実は、そのどこにも定められないと同時にどこにでも置くことができる。グリーンの『キホーテ神父』は、この『ドン・キホーテ』を内に含むことで，更にその外側に（神父の出自の問題に見られるように）フィクションと現実が混在するレベルを形成している。“Series of Chinese boxes”（Allen 920）と喩えられる『ドン・キホーテ』の構造を、意図的に繰り返して見せているのだ。

現実／事実とフィクションの関係を問う『ドン・キホーテ』は、フィクションの層の積み重ねによって形作られる。そして逆にそのことで、明白にフィクションである「遍歴の騎士ドン・キホーテ」が、現実に変わる可能性も存在することとなる。「遍歴の騎士」と読者の現実との間の距離のどこかに物語内現実が位置するわけであるから。「キホーテ」神父とは、『ドン・キホーテ』のこの距離の仕掛けの具象化である。存在と非存在の可能性を併せ持つ「キホーテ」神父は、現実とフィクションとの曖昧な境界線上の存在である。こうして現実とフィクションの問題は、グリーンの小説に受け継がれている

のだ。

II

神父（モンシニョール）であるグリーンの「キホーテ」は、遍歴の騎士の「キホーテ」とは異なった身分である。しかし２人の行動がしばしば類似したものと映るのは、単にパロディ的模倣というだけでなく、１つには騎士道物語の世界を体現するドン・キホーテと，福音書・聖人の書物の世界を体現するキホーテ神父という構図が類似しており，更には騎士道とキリスト教（カソリック）信仰が同様のモラルに基づいているためである。ドン・キホーテ自身もそのことには触れている。

> ... these saints and knights were of the same profession as myself, which is the calling of arms. Only there is this difference between them and me, that they were saints, and fought with divine weapons, and I am a sinner and fight with human ones. (DQ 743)

またこの関係を裏付けるように、ウナムーノはその著書でドン・キホーテを、「キリストの騎士」イグナティウス・ロヨラと重ねて描いている。しかしここで見ていく２人の冒険の類似は、もう少し別の面である。

上記の先祖の言葉に応えるように、神父は小説の終わり近く聖職者としての戦いに赴く。それは、金で免罪を買おうとする金持ちのメキシコ人達と彼等から金を受け取る司祭の冒涜から聖母像を救い出す戦いである。“We are going into battle, Sancho. I need my armour. Even if it is as absurd as Mambrino's helmet” (MQ 195). と、モンシニョールの位を示す紫の衣の「鎧」に身を固め、戦いに身を投じる。これと対をなす『ドン・キホーテ』のエピソードは、前篇第52章、雨乞いのための行列で教会に運ばれている聖母像を、悪漢に連れ去られている身分の高い婦人と妄想するドン・キホー

テが、行者達に襲いかかる話だ。騎士の崇高な目的にも関わらず、その行為は周りの人には、"What devils have possessed you to set you against our Catholic faith?" (DQ 398) との言葉を発せさせるものに見えるのである。聖人達と同様の務めのはずが、カソリック信仰に反するものとなるのは、文字通り「悪魔が憑いた」からだ。ドン・キホーテの冒険では、これは比喩的な表現ではない。彼の妄想（あるいは騎士の理想）と現実との相違・ズレは、悪魔や邪悪な魔法使いの魔法によってもたらされている。"Since this magic has been foreseen and described in the books, the illusory difference that it introduces can never be anything but an enchanted similitude" (Foucault 47) との見方にもあるように、騎士道物語中に承認されている魔法は、類似を相違へ、あるいは相違を類似へと変える仕掛けである。ドン・キホーテにとっては, 実際には類似しているものを相違に変えているもの、読者にとっては現実の相違をドン・キホーテが類似と見てしまう（滑稽さを引き起こす）原因がこの魔法なのだ。

一方キホーテ神父の戦いの結末は、聖母像を救い出す（あるいは神聖冒涜の行為を悔い改めさせる）どころか、暴動を引き起こすこととなる。ある意味で、これは神父の冒険中最もドン・キホーテ的な展開だ。（神父がもっと殴られて、それを見て腹を抱えて笑う者達が登場すれば完璧である。）その戦いに出向く直前、神父の旅の連れ、サンチョことエル・トボーソの前市長は言う。"Do you think that the monsignor's ancestor really represented the chivalry of Spain? Oh, it may have been his intention, but we all make cruel parodies of what we intend" (MQ 193). ドン・キホーテとの比較であるこの言葉は、後に続く戦いの結末を予見しているものと言える。では神父の冒険で、その理想（彼の場合、そう呼んでも差し支えはないだろう）とその「残酷なパロディ」となる現実の結果との距離を埋めるものは何であろうか。グリーンのこの小説を読めば即座に分かることだが、神父の信仰（特に神への愛）が現実の展開とは異なる理想を彼に抱かせる。

もしくは、信仰があるため彼の意図は現実の結果とはかけ離れたものとなる、と言う方が良いかもしれない。

ただしキホーテ神父の信仰は、現実との距離を説明するためのものというより、距離を意識するところから生じていると言える。“I am riddled by doubts. I am sure of nothing, not even of the existence of God” (MQ 179) とまで感じる疑いや不確かさは、一見信仰と矛盾するように見えるが、キホーテ神父の冒険中繰り返し確認される彼の特質である。神父は、その信仰が疑いを少しも含まない完全なものである場合について、“then perhaps I could have burnt my books and lived really alone, knowing that all was true. ‘Knowing’? How terrible that might have been” (MQ 179). と、「分かっていること」、概念と現実が全く一致している状態での恐怖を語る。それは、“There was no ambiguity, no room for doubt and no room for faith at all” (MQ 67). という恐怖。つまり不確かさや疑いがあるから、信仰や神への愛が入る余地があり、また書かれている内容と相違があるから本を焼かずに比較参照するのである。

キホーテ神父は福音書や聖人の書物を好んで読み、現実との距離にその書物中に表される神への愛の可能性を見る。その彼がドン・キホーテと自らを度々比較するのは、2人の類似性や先祖－子孫の繋がりに疑いを差し挟む余地があるからだ。疑いによって認められる距離・相違は、その距離を埋めるもの、相違を類似にするもの、つまり「魔法」の存在の前提である。換言すれば、不一致、相違があるからこそ、類似性を見出す比較をする余地があるということである。ドン・キホーテとその子孫の冒険と戦いは、読者にこの距離に作用する「魔法」の存在を認識させる。そしてこの類似性の「魔法」は、またその読者が用いているものでもあるのだ。

III

これまでのところ、まず最初に遍歴の騎士ドン・キホーテの子孫「キホーテ」神父という存在について、そこに『ドン・キホーテ』における現実とフィクションの曖昧さが体現されていることを考察した。次に信仰や類似性の指摘のような「魔法」的働きかけは、相違や不確かさの作り出す距離に対して働くものであることを見た。セルバンテスのドン・キホーテとグリーンのキホーテ神父との間の類似も、距離に作用する「魔法」である。そしてこれから見ていくのは、この2人の間の最大の相違と言えるその死に方についてである。

『ドン・キホーテ』の最後でラ・マンチャの郷士は、"Good news for you, good sirs: I am no longer Don Quixote of La Mancha, but Alonso Quixano, whose way of life won for him the name of Good" (DQ 826). と宣言して世を去る。フィクションである遍歴の騎士が存在しなくなったため、「現実」である「善人アロンソ・キハーノ（Alonso Quixano)」との間の距離はなくなり、魔法もまた消えたように見える。だがその記述が疑われるべきものであるのは、前述の通りである。そもそも実体であるはずの「アロンソ・キハーノ」は、物語冒頭で挙げられる「キハーダ」、「ケサーダ」、「ケハーナ」のどの名前とも一致しておらず、（このように不確かなのは、邪悪な魔法使いの仕業に違いない。）この不確かさには疑いの入る余地がある。何より上の宣言の後、すなわち郷士が「妄想」から醒めた後でも、語り手はその者を「ドン・キホーテ」と呼んでいる。名前も定かでない郷士を、ドン・キホーテと見せる「魔法」は依然残っているのだ。先の宣言はドン・キホーテの消滅ではなく、フィクションという身分からの解放を表している。我々読者の現実でも、彼は「ドン・キホーテ」であり、そう見せている「魔法」が存在しているのだ。

実際ウナムーノのテクスト『ドン・キホーテとサンチョの生涯』(1905)

では、相違と類似の間に働く「魔法」は消え去りはしない。「なぜならば騎士よ、汝の信仰は、今日ではサンチョの中に蓄えられているからである。善良なる郷士よ、死ななかったサンチョが汝の精神の後継者なのだ」(ウナムーノ 340)。そして（彼のサンチョと同様）ウナムーノ自身、キホーテ的「魔法」を引き継いでいる。

> われらの騎士の物語と、セルバンテスが書いたその他すべての作品とを分かつこの無限の距離、このきわめて明白かつ輝かしい奇跡は、われわれがこの物語を真実の実話であり、ドン・キホーテ自身がシーデ・ハメーテ・ベネンヘリと一体となって、セルバンテスに口述したことをわれわれが信じ、かつ表明するための主要な理由 . . . なのである。（ウナムーノ 350）

『ドン・キホーテ』とそれ以外のセルバンテスの作品とのできの違いという「距離」に「魔法」が働き，フィクション（ドン・キホーテの物語・架空の歴史家）は現実に、現実（セルバンテスが『ドン・キホーテ』の作者であること）はフィクションになる。「これら登場人物たちはまさしく実在するもの、あらゆる実在性を備えているものであり、彼らの方こそ人々の前に存在と形態を獲得するために、肉と骨を備えた人間であるとわれわれに思われている作者を利用しているのである」(ウナムーノ 351)。

セルバンテスの『ドン・キホーテ』に見られる、フィクションの層が作り出す距離は、このようなウナムーノの読みという「魔法」が入り込む余地である。そしてここでウナムーノを取り上げたのは、“Greene ... comes to Cervantes largely through his reading of Miguel de Unamuno” (Pendleton 153-4). との指摘もあるように、グリーンのキホーテ神父にとってウナムーノは、先祖の物語の記録者の１人であるからだ。この記録者は、「肉と骨」の実在がフィクションと現実の絶対境界線ではないとして、ドン・キホーテの物語を読む。その受容の形を表して、“Don Quixote really and

truly existed and did all the things that Cervantes tells us about" と主張し, "in the way that almost all Christians maintain and believe that Christ existed and did all the things the Gospels tell us about" (Unamuno 975) と付け加えている。フィクションの現実性を認めることを、信仰での信じる行為と並置するこの見解は、キホーテ神父の物語とセルバンテスの『ドン・キホーテ』との間の距離を縮めるものだ。

ウナムーノのテクストよろしく、キホーテ神父の旅の連れ「サンチョ」前市長に、神父の信仰は引き継がれることとなる。ただしそれは読み・解釈が入る余地のある、曖昧さを含んだ描写で示される。この物語の結びは以下のようなものである。

> Why is it that the hate of a man ... dies with his death, and yet love, the love which he had begun to feel for Father Quixote, seemed now to live and grow in spite of the final separation and the final silence—for how long, he wondered with a kind of fear, was it possible for that love of his to continue? And to what end? (MQ 221).

「如何なる結果へ導くのか。」キホーテ神父への愛が、神父の信仰の形であった神への愛に変わることは、(コミュニストの前市長の恐れを伴った) この言葉に暗示されている。死ぬ間際に、意識があるかどうかはっきりしない状態のキホーテ神父は、ただ身振りと言葉だけで、"the non-existent wine", "the non-existent chalice", "the invisible paten" そして "the invisible Host" (MQ 215-6) を用いて儀式を行う。神父への愛は、前市長にこの儀式をミサと認めさせるだろう。そしてこの疑う余地のある「ミサ」を認めることは、"Do you think it's more difficult to turn empty air into wine than wine into blood?" (MQ 220) との言葉にほのめかされる神父の、と同時に神の「魔法」を信じることである。

言うまでもなく、カソリックのミサは福音書に描かれるキリストの最後の

晩餐を模して行われる。従ってキホーテ神父のその儀式がミサとして成り立つのは、ワインやパン（聖体）がない／見えないという相違にも関わらず、福音書の話との類似が確認される場合。すなわちキホーテ神父の信仰を引き継いだであろう「サンチョ」前市長がそう「信じる」ときなのだ。ウナムーノの『ドン・キホーテ』の読みは、また『キホーテ神父』の読みともなっている。キリストと同様ドン・キホーテも存在する可能性はある。そして「肉と骨」ならぬ「血」と「肉」の実体を伴ってなくとも、それがミサと認められる余地があるのだ。グリーンのこの物語のクライマックスで我々は、余地（距離）に働く「魔法」が存在を生み出す可能性を目にする。

遍歴の騎士ドン・キホーテは、物語の上では消えて／死んでしまう。だがそれは郷士のフィクションという位置からの解放であり、例えばウナムーノの読みの中に現実の存在として残っている。このようなフィクションを現実に変える「魔法」が、グリーンの小説で二重に用いられている。キホーテ神父の物語中、実体は持たないが，ワインらしきものとパンらしきもの、言うなればフィクションのワインとフィクションのパンが現実の存在に変わるのであれば、それは『ドン・キホーテ』内のフィクションである「魔法」を、現実にグリーンが引き継いだということになる。そういう意味では、キホーテ神父がドン・キホーテ子孫である余地も十分にあると言えよう。

結　び

ウナムーノは『ドン・キホーテとサンチョの生涯』で、セルバンテスの『ドン・キホーテ』を全く同じに繰り返したわけではない。また異なっているからこそ比較する余地もあるのだ。実際ウナムーノのテクストは、セルバンテスのテクストと比較可能なドン・キホーテの物語の１つの読みとなっている。そしてドン・キホーテを真の英雄でありまた現実の存在とするその読みに、ドン・キホーテ的精神が引き継がれているのを読者は見る。とすれば、

異なっているはずの２つの物語を比較して、類似性を見出す読者もまた、ドン・キホーテ的「魔法」を継ぐ者である。

ここまで行ってきた２つ（３つ）の物語の比較でも，結果的にそれらが類似しているとの読みを示してきた。現実とフィクションの境界線上に存在する２人の「キホーテ」、相違と類似の間を埋める「魔法」、そして類似によって存在を成り立たせる「魔法」が働く可能性つまりフィクションも現実となる可能性があること。これらの類似性を導き出す仕掛けとなっているのが、グリーンの用いた「魔法」、フィクションとされるドン・キホーテの子孫キホーテ神父を物語内に存在させたことである。（実際のところ血の繋がりが、俗説以上に類似性を保証するのかは疑問の残るところであるが）この先祖－子孫の関係は、フィクションと現実とを相対化し、相違に類似を読み込んでいく裏付けとなっている。そして邪悪な魔法使いの「魔法」とは、結局はドン・キホーテのものであったと考えると、グリーンの「魔法」とはすなわち読み手の「魔法」である読みに他ならない。『ドン・キホーテ』と『キホーテ神父』の距離には、相違と類似が同時に映し出されており、ここで示した読みとは逆に，両者が全く異なっているとも読める。このような不確かさこそが読みここでは２つの物語の間に類似性を見出す「魔法」の入る余地なのだ。

グリーンのこの小説は、前提としてドン・キホーテの物語とは異なっている。その両者の間にあらためて類似性を指摘する場合には、そこに何らかの必然性がある。例えば『キホーテ神父』に『ドン・キホーテ』が如何に取り込まれているか、その受容の形の解明である。そしてその受容の形が類似性発見の「魔法」の入る余地の引き継ぎであると言う場合には、それが読者自身についてもあてはまるように、余地の中継でもあるのだ。

Notes

本稿は、日本英文学会中国四国支部第50回大会（1997年11月1日、於：広島女子大学）における発表原稿に加筆修正したものである。

1. 人名・地名の日本語表記については、会田 由訳『ドン・キホーテ』（世界文学大系10, 11（筑摩書房, 1960, 1962））によるものを使用した。

Works Cited

Allen, John J. "Levels of Fiction in Don Quixote." *Don Quixote: The Ormsby Translation, Revised; Backgrounds and sources, criticism.* Eds. Joseph R. Jones and Kenneth Douglas. New York: W. W. Norton & Company, 1981. 919-927.

Cervantes, Miguel de. *Don Quixote: The Ormsby Translation, Revised; Backgrounds and sources, criticism.* Eds. Joseph R. Jones and Kenneth Douglas. New York: W. W. Norton & Company, 1981.

Foucault, Michel. *The Order of Things: An Archaeology of the Human Sciences.* New York: Vintage Books, 1994.

Greene, Graham. *Monsignor Quixote.* London: The Bodley Head, 1982.

ウラジーミル・ナボコフ（Nabokov, Vladimir）『ナボコフのドン・キホーテ講義』行方昭夫、河島弘美 訳　東京：晶文社、1992.

Pendleton, Robert. *Graham Greene's Conradian Masterplot.* Houndmills: Macmillan, 1996.

Unamuno, Miguel de. "On the Reading and Interpretation of Don Quixote." *Don Quixote: The Ormsby Translation, Revised; Backgrounds and sources, criticism.* Eds. Joseph R. Jones and Kenneth Douglas. New York: W. W. Norton & Company, 1981. 974-979.

ミゲル・デ・ウナムーノ　『ドン・キホーテとサンチョの生涯』アンセルモ・マタイス、佐々木孝 訳　東京：法政大学出版局、1972.